
It

AA

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

It

【Nコード】

N10580

【作者名】

AA

【あらすじ】

誰でも独りは怖いけれど、あえて独りにならなければならない時もある。

俺が独りになって、独り傷ついて、ひっそりといなくなれば、俺の大切な二人は幸せになると信じていた。

二人につけた傷を抱えていなくなれると、馬鹿な俺は信じていたんだ。

『それ』が俺にそう言ったから。

（前書き）

何も投稿しないのでは寂しいので、過去作品から持ってくることにしました。

封印したい黒歴史の中でもマシですが、正直恥ずかしい。

できれば、ほんのちょっとした暇つぶしにでも使ってやってください。

自分が『それ』だと気がつくまでに、幾ばくかの時間が必要だった。自分が他人に対して『それ』を思い始めたのは、必然だったのだろう。自分が他人を遠ざけるようになった。『それ』は、必然なのだ。

そして、俺は、誓った――

「優、どうした？ 顔色が悪いぞ」

涼やかな声。俺の幼馴染。或^{アル}という名の少女。

どうやら俺が立ち止まって考え込んでいたことに、或は気がついたのだと思う。

近寄ってくる気配がして、俺の額に手をやる感触がする。彼女の手はひんやりとしていた。

「大丈夫？ いつものやつ？」

高い、少女のような声。俺の幼馴染その二。眞^{マコト}という名の少年。

彼も気がついて、俺の方に近寄ってくる。心配そうにしているのは声で分かった。

「熱は……無いな。でも本当に顔が真っ青だ」

ひんやりとした或の手が俺の額を優しく覆った。

「……失せる」

俺は鬱陶しく或の手を払い、通学鞆を肩に担ぐと、心配する二人を無視して歩く。

でも、足元はおぼつかず、ふらふらしながら学校への道を歩いているのが、自分でも分かった。

舌打ちを一つ。何度も頭を振った。

後ろからは、やはり心配そうに近寄ってくる足音二つ。

――放っておけばいいものを。何度言えばわかるんだ？

いらいらと神経が高ぶっていく。いつもお節介を焼く幼馴染二人が疎ましかった。どうしてつきまとう？ どうして辛くあたるのに

また声をかけてくる？ 誰とも関わりあいたくないというのに。

—— 何で俺なんかの幼馴染になったんだよ。或、眞……。

四年前、『それ』、はもうすでに俺を浸食していた。感情が抑えきれない。俺が他人を嫌いになるのは必然だった。

その当時幸運だったことと、不幸だったことが一つずつある。

幸運だったことは、一番多く接触する他人、両親がすぐに死んだことだった。徐々に進行してきていた『それ』にとって、両親は最も厄介な存在。いれば俺の障害になることは目に見えていた。だから、その人間たちが早々とこの世を去ったことで、俺は『それ』を知られずにほつとしたものだ。

不幸なことは、俺に素晴らしき幼馴染二人がいることだろう。

両親の死んだあと、二人は身寄りのいなくなつた俺を気遣い、孤独にならないよう、片時も離れることがなかった。

それが苦痛以外の何物でもないのは、何よりも『それ』があつたから。

俺の『それ』によつて、俺は他人を拒絶しなければいけない。自分の中に存在する他人をよしとしない『それ』は、俺の望む孤独を作ってくれるはずだった。或と眞以外は。

『それ』は俺をかなりの率、浸食している。『それ』が俺を蝕みきつた時、俺は弱さから誰かを求めてしまつかもしれない。だからその前に、俺は或と眞を引き剥がす必要がある。

どんな手を使ってでも。

学校に着いて、授業が始まって俺は、ずっと席で座つて窓の外を眺めていた。

小鳥のさえずり、校庭の桜が散っていく音、冷やかな春の匂い、黒板にチョークで記載する騒音、遠くで犬が吠える声、転がす鉛筆の堅い感触。

人のいない世界、自分のその世界に俺は浸る。そうやって無作為

に学校生活を送る。その繰り返し。それでいい。

俺は『それ』だから、誰かと歩む未来を考えない。自分と、世界以外は知らない。それが『それ』の望み。

そして、俺はもうすぐ一人になれる。ようやく望みがかなう時が来た。だから、その念願の時までに、妨げになる幼馴染は排除したかった。

同じ教室内にいるはずの或と眞を、どうやって遠ざけるか、それだけを頭の中に展開し、気だるい昼休みを迎えた。

「おい！ 昼飯食おうぜ、優」「一緒に食べようよ、優」

いつもながら性別の逆転したセリフだ。いつそのこと、中身を取り出して、入れ替えたら丁度良くなるんじゃないだろうか。それぐらい或は男前だし、眞は女っぽい。

この三人で昼飯を食うのは当たり前の光景、らしいが、或と眞以外の視線が降りかかる。なぜなら、

「消える。飯が食いたきゃお前らで食え」

毎回俺は二人を同じ言い方で拒否する。その後聞こえてくる、或と眞の取り巻きの囁き。俺を非難し、二人を気遣うクラスメイト達の声が鋭く突き刺さってくる。

それはそうだ。

或は成績優秀で、男女問わないからつとした性格、誰もが好きになるような太陽のような女の子。率先して何でも自分でやるし、リーダーシップを取るのもうまい。

眞は女子のような外見に似合わず、サッカー部のエース。生来の優しく、時には厳しい性格と、人を包み込むような笑顔と包容力で男子には弟のように可愛がられ、女子にファンができるほどだ。

そんな人気者の二人を、それぞれ太陽の或、月の眞なんて二つ名が付いている。ちなみに俺はその周りを回っている宇宙ごみ、だそうだ。

ごみが太陽と月と飯食ってる。昼休みの情景を表すとそうなる。

何度来るなど言っても、或と眞は何が楽しいのか俺を交えて昼食を取る。

今日も俺の言葉を気にせずに、無邪気に弁当の包みを開けようとしていた。

だからだろう。二人の行動が気に障った。

俺は思わず、或と眞が弁当を広げていた机を蹴り飛ばしていた。

弁当が床にぶちまけられてぐちゃぐちゃになる音をたてて、机が他の生徒の机を巻き込んで倒れる音がした。

「——何度も言わせんなよ！俺に付き纏うな！言ってる意味分かってるよな？これが最後だ。俺はお前らとは一緒にいたくない！——っ、俺の前に二度と顔を見せるな！」

詰まる息を荒げ、俺は二人のいる方向に目を向けながら、矢継ぎ早に言葉を紡いだ。ありったけの罵詈雑言を思いつく限りに。

「ゆ、優、」

もうそれだけ言うと、俺は或の言葉を聞く前に教室を出て行った。背後にクラスメイトの怒気と視線を受けながら、俺はふらつく足を必死に矯正して、保健室へと向かった。

「急患一つ」

ぞんざいに保健室のドアをスライドさせて、出前のように言った。
「頼んでない」

保健室の主はさらにぞんざいに返す。それが俺と彼女の合言葉。俺は後ろ手にドアを閉め、空いているだろうベッドの方へと直行した。

「ちょっと待て、勝手に寝ようとするな」

それを保健医は引き留める。

「眠い。それだけ言えばいいか？それじゃ」

「だから……ちょっと待てと言っている」

いつもなら、「ああ、勝手に寝ていけ」と簡単に許可が下りる。

だが、今日の主は少し怒っていた。

「少し座れ」

指差す椅子と、主の顔を見比べて、溜息一つ。

「何スか？」

座ったとたん視界が右へと歪む。俺が平手打ちされたと気がつくまで、数秒の時間がかかった。

「体罰はいけないと思うんだけど？」

叩かれた頬を抑えながら、平静に聞いた。表情は分らないが、彼女は怒っていた。

「幾らなんでもお前はやりすぎだ。二人をまた泣かしたそうだな？」
思ったよりも情報が早い。それよりも、

「そうか……あいつらは泣いた、か。はは、やっと俺から離れてくれるかな？」

もう一度衝撃。平手打ち。それも先ほどより強い。

「薄ら笑い浮かべて、お前は何も感じないのか？ 何度も何度も幼馴染を痛めつけておいて、お前は何を考えているんだ？」

怒りで声が震えていた。それに俺はさらに口角を上げる。

「何も、考えてない。ただ俺は、二人が傍にいるのが我慢ならない。いつまでも俺の周りをうるちよるするから、ああするしかなかったんだよ」

「……分かった。もう何も言わない。好きにしろ」

空を切るような風切り音。保健室の主は手を振っている。

俺は言われた通りに席を立ち、ベッドの方へと向かった。

「おい」

呼ばれて反射的に振り向いた。

「二人を傷つけて、お前はどんな気持ちなんだ？」

質問の意図は分らない。でも俺は笑いながら答える。

「せいせいした、かな」

その答えに満足したのかどうかを知るすべはなかったが、主は「もういい」とだけ答えて、それから口を開くことはなかった。

昼休みからおおよそ四時間ほど。俺は重い体を騙し騙し動かしながらベッドから這い出し、その体で上靴を履いた。

もうすでに主はおらず、温かな斜陽だけがそこに佇んでいた。

——もう誰もいないだろう。荷物、取りに行くか。

下校時間をとうに過ぎて、校舎はしんと静まり返っている。

時々部活帰りの人の声があるが、廊下を歩いていても、誰一人としてすれ違わなかったし、気配一つすらない。

時々廊下の壁や入口のドアにぶつかりながら、俺は自分の教室まで進む。

何度も階段を昇り、悲鳴を上げる心臓を引っ掴むように、学生服の胸のあたりを握りしめ、ようやく教室のドアまで来る。

開けた瞬間、俺の席の辺りに誰かがいた。

「……誰だ？」

予想はついている。この気配は——

「優……」

涼やかな声。或の声だ。

意識せずに冷やかな声が口を滑って降りた。

「今すぐだ。俺の前から消えろ」

目の前の或がたじろぐ。俺は自分の席までの最短距離を、他の生徒の席をどかしながら、早歩きで席まで行く。

或を無視して、席の中へと手を突っ込んだ。

「だ、駄目！」

或が叫んで、俺の手を掴もうとするが、俺が席の中身を取り出す方が早かった。

「……………」

大体予想通り。俺の教科書類、文房具類、机の中身全てが滅茶苦茶に荒らされていた。がさがさになった紙類の感触が忌々しい。

まあ、当然だな。

俺はさほど気にせずに、壊れたモノを鞆に詰め込んでいく。

「優、どうして……どうして私と眞に冷たくするのさ？ 私たちが何かした？ 四年前からだよな、優が冷たくなつたのって。前の意地悪だけど優しくつた優は何処へ行つたんだよ？ ——優、答えてくれよ……」

俺はその問いかけを無視し、声をかけることすら嫌そうに、口を開いた。

「まだいたのか？ さつさと消えろつて言つたよな。俺はお前のような人間が大嫌いなんだよ。顔を見ただけで反吐が出る」

喋っている時間がもつたないと思い、さつさとこの教室から出ようと或に背を向けた。

でも、俺はそれ以上進めなかった。

真つ直ぐ進んでいたベクトルに、後ろ向きの弱いベクトルがかかる。俺はその場で止まらざるを得なかった。

「或、何のつもりだ？」

帰ろうとしていた俺の左腕を、或は全体重を乗せるかのように抱きしめていた。

久方感じなかった、人の温もり。それが今俺の腕に伝わっていた。

「——お願いだ！ 私と、眞を嫌いにならないでくれ！ お願い、だから……」

空気を震わす或の嗚咽。それが俺と或しかない教室に響く。

俺は或に向き直つて、伸ばした右手を、引つ込めて振り被つた。

鈍く、乾いた音が或の嗚咽をかき消した。

俺が振り被つた右手は、泣いていた或の右頬を打ちすえている。

「……………」

何が起つたのか分かつていない或は、自分の頬を両手で押さえ、理解した途端、大粒の涙を瞳に浮かべる。

「もう、これで本当に最後だ。分かつただろう？ 俺に近づくな。

これ以上傷つきたくなかつたら早く帰れ。……そして、俺のことは忘れる」

「——っつ！」

弾かれるように或はその場から走って行つた。その足音は、吸い込まれるように消えて、その場には誰もいなくなつた。

俺は或に掴まれた左腕を眺めて、何気なしに触れた。その腕に、或の体温が残っているかもしれないと思つて。

「——はは、俺、もう壊れてるな……体温なんて、分からない」

触覚が働いていなかった。それ以前に、視覚はもうほとんど機能していない。目の前が何処なのか、目を開いていても認識できていなかった。

「ぐう！——ぐぶう！」

ぽた、ぽた、ぽた——

抑えた口元から、真つ赤な血が、俺の命の一部が滴り落ちる。よく、或がいなくなるまで我慢できたものだ。

膝から力が抜け、そのまま地面と膝が接地した。

「ううう……ぐ、うぐ……げほ、げほ……はあ、ぐう、はあ、はあ……はは、ははは……あはははは——」

笑えた、『それ』はすでに俺をほぼ全て掌握していたのだ。俺の中はもうぼろぼろに、劣化していた。

「あはははは……あは、ははははは。あははは、はは、ははは……」
もう、自分の笑い声さえまともに聞こえていない。聴覚すらイカレ始めている。

でも、笑えた。

次の日、俺は一日だけ学校を休んだ。

もちろん家の前に或と眞が来るはずもなく、俺はそれを寂しいと思わず、むしろ良かったと安堵しながら、近くの駅へと歩いた。
行き先までの切符、千。五。円を買おうとして、券売機のスイッチを押そうとした。だが、ふと考えなおして、乗れるところまでの

切符代を払った。財布の中身をほぼ使い切って。

その馬鹿高い片道切符を手に、改札を抜け、行き先の電車に乗って、俺はある場所へと向かった。

揺れる電車の中で、俺は四年前のことを思い出していた。

四年前、中学二年のころの俺は体調を崩して一人病院へ行った。

その時はなんてことない風邪だろうと考えたが、意外に病院での検査は長引いた。

そして、俺は死病を宣告された。

医師が言っていた、若年性のガンがどうたらこうたらは、耳を素通りして脳で理解できないでいた。

それでも、自分がもうすぐ死ぬということだけは、漠然と理解してしまう。そんな冷静な自分もいた。

一つ、幸運だったこと、自分の体のことを言う前に両親が事故で亡くなったこと。

「何処が幸運なんだか……」

自嘲気味に呟いて、その当時の俺はよく持ったものだと感じながら、無性に泣きたい気持ちをどうにか抑えていた。

それから俺は、徐々に進行する病魔のことを、誰にも、幼馴染にすら話さず、誰も自分の傍にいないように他人を拒絶し続けた。

徐々に死に向かう体が怖かった。誰にも分かせないように孤独に耐えた。両親の死に悲しんでいた俺を、献身的に励まそうとした或と眞を遠ざける苦しみは、声にならない叫びになって、夜に一人泣いた。

でも俺は、誰も俺の死で悲しませない。皆に幸せに生きて欲しいという自己満足を胸の中心に置き、この日まで生きてきた。

それも今日で終わりだ。俺の馬鹿で自己犠牲な試みは、見事成功の形を迎えることだろう。

電車は、目的の駅に制動をかけながら、停止した。

駅を出た俺が行くべき所はただ一つ。駅から少し歩いた所の小高い丘に、その霊園は存在していた。

両親が眠っている墓。そこに、俺は一度しか行っていない。行けば俺の病気がことが、あの世の両親に知れてしまうかもしれないという、馬鹿な考えを持っていたから。

そして、うる覚えの墓の場所を三十分歩いてやっと見つけた。

墓の前で立ち、買っておいた和菓子と花、線香と酒を墓前に供えると、静かに手を合わせ、同様に口を開いた。

「……父さん、母さん、俺、頑張ったよ。馬鹿なことだけど、俺は頑張ったんだ。或も、眞も傷つけた。でも、二人はこれ以上傷つくことはないよ。……俺は、黙って消えるからさ」

一度、深く一礼すると、俺はその墓に背を向けて、涙交じりの声で言った。

「不肖の息子でごめんなさい。最低の友人でごめんなさい。全部、向こうに持って行きます……」

俺は携帯を開くと、メールソフトを起動。短文で、或に向けてメールを送った。

「ごめん」という、未練たらたら最低の文章。俺は苦笑しながら、送信を押した。

名残惜しいが、いつまでもそうしてはいられない。携帯を畳んでポケットにしまう。

ゆっくりと霊園の奥の奥へと進んだ。

丘の向こうには、少ししか見えていない目にも映えるような、きらきらとした光を放っていた。

最初に来た時に見た、霊園の奥の海。

霊園と海を隔てる岸壁の縁に俺は靴の爪先を合わせ、目を閉じて、歪に聞こえる海の音と、薄くしか感じ取れない海の匂いに包まれた。

『それ』はやっと俺の中から自由を得て、俺を終焉へと向かわせていた。

恐怖はない。むしろ解放された気分だ。

一步、踏み出す。

そのまま、すうっと吸い込まれるように、俺の体は海の方へと傾

いていく。

ずれていく感覚の中で、俺は一言だけ歌うことを許された。自分へのレクイエムを。

「或、眞、幸せに、な」

俺は、宙へと浮かんで、墜ちた――

「――っ！」

はずだった。

「馬鹿野郎！ お前なしで幸せになれるわけないだろう！？」

「――ふうっ、間に合った……」

逆光の中、俺の腕を必死で掴んでいる或と眞の姿がそこにあった。

――何が、起こっ、た？

ずるずると引きずられるままに、俺は崖とは反対側に戻ってきた。
「なん、で……何でお前たちが、ここに？」

訳が分からない。俺はもうどちらがどちらか判別できない二人に、震える声で聞いた。

「何でって……なあ、眞？」

「そうだね。優はとてつもなく嘘が下手だって、自分で気がついてた？ 僕達、優の体のこと、知ってたよ」

「え……」

「お前がおかしくなって、それから調べ始めたんだよ。お前が通ってるらしき病院を探し出して、お前の主治医を問いただしたからな」
「な、なっ――」

「昨日の優の様子がおかしかったって、或から聞いたからね。優が馬鹿なことしないように朝から見張ってたんだ」

意地悪い笑みで眞。

「そんで、つけてみればこんな所に来るし、携帯にごめん、なんて送られたらなあ」

と、同じ笑みで或は言った。

或と眞はくすくすと、馬鹿な俺を笑っていた。

「でも、俺は、お前たちに、酷いことを。なのに――」

世界が、右へとスライドした。

最初は何が起こったのか理解できなかったが、俺は叩かれたのだとしばらく経って気がついた。

「優、これでおあいこだ。もう自分一人で抱え込むなよ」

「一人で、死ぬような真似はしないで。僕達は、優がいないと、駄目なんだから」

俺を挟んで、二人はぼろぼろと涙を零す。

僅かしか感じられない、或と眞の涙の感触に、俺は初めて二人の前で泣いた。

「なあ……俺が、死ぬまで、一緒に……いてくれるか？」

俺は恐る恐る、そう訊ねた。

二人は当たり前のように、こう答えた。

「馬鹿、当たり前だ」「うん、ずっと一緒だよ」

その言葉に、俺はもう一度、声を上げて泣いた。

もう少しこいつらと生きてみたいと、強く思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1058o/>

It

2010年10月8日13時39分発行